

哲人ヤージニャヴァルキヤ

——初期ウパニシヤットの世界——

湯 田 豊

序 論

ヤージニャヴァルキヤ (Yajñavalkya) は、ウッターラカ (Uddalaka) と並んでウパニシヤットを代表する思想家として有名である。ヤージニャヴァルキヤは、初期のウパニシヤットであるブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシヤット (Bṛhadaranyaka-Upaniṣad) のなかで活躍するが、同時にまたシヤタパタ・ブラーフマナ (Satapatha-Brahmana) でも祭祀の専門家として登場する¹⁾。わたくしがここで扱おうとするのは、ウパニシヤットの哲人ヤージニャヴァルキヤである。ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシヤットにおいて、ヤージニャヴァルキヤはウッターラカやガールギー女史などを始め多くのバラモンの論客と論争し²⁾、ヴィデーハ国王ジャナカと問答を行なう。しかし、ヤージニャヴァルキヤの円熟した思想をよく伝えるのは、愛妻マイトレイーとの対話であろう。わたくしははす最初にマイトレイーとの対話に拠って、ヤージニャヴァルキヤの根本的な

立場を理解したいと思う。ブリハッド・アキラニヤカ・ウパニシャッドには、ヤージニャヴァルキヤ夫妻の対話を伝える箇所は、実は、二箇所ある。ここでは、そのうちの二箇所（IV・5・1以下）を典拠として、その特徴を述べてみたい。

ヤージニャヴァルキヤは、愛妻マイトレーイーともう一人の妻カーティヤヤニーとの間を清算して、いずかへ漂然と去ろうとするが、放浪の旅に出る直前に彼はマイトレーイーに対して不死を教えようとする。ヤージニャヴァルキヤの教えは、「ああ、実に、夫を愛するから夫がいたいのではなく、アートマンを愛するから夫はいたい。」ということばで始まり、「マイトレーイーよ！実に、アートマンが見られ、聞かれ、考えられ、認識される時、このすべては知られる。」（IV・5・6）という文句で終わっている。夫や妻、あるいは息子や財産などを愛するからそれらがいとしいのではなく、アートマンを愛するからそれらがいとしいのだ、というのが、ヤージニャヴァルキヤの思想である。

ウパニシャッドにおける最大の特徴はアートマンの発見である。ウパニシャッドの哲人たちは、アートマンの発見の喜びにいわば酔い痴れたのであった。ヤージニャヴァルキヤ自身も、アートマンの発見によって世界に対して一つの新しい関係をもつことになった。アートマンはすべてのものに含まれ、それだけが世界の真実の核心である。そして、アートマンは世界の核心として認識されたのだから、この世におけるすべての事物は「あの形而上学的な偉大さの表現として感じられる」のである。「アートマンを愛するから夫はいたい」という表現は、アートマンが「価値の価値」であることを意味する。夫そのものに価値があるのではなく、夫がアートマンという名の「形而上学的な偉大さ」を表現しているから、夫は価値があるというのである。「アートマンのほかにバラモンを知るもの、彼をバラモンは見捨てた。」（IV・5・7）という文句も同じ趣旨である。アートマン以外にはこの世

には何一つ価値が存在しないということを、この有名な文句は示している。

アートマンはすべてのものに含まれ、すべてのものの核心であることを如実に示す文句は、おそらく次のものであろう——「大地のなかにあつて大地と異なり、それを大地は知らず、大地がその身体であり、大地を内部にあって制御するもの——これがお前のアートマンであり、内部の制御者であり、不死なるものである。」(Ⅲ・7・3)。アートマンは大地を始め、水・火・空・風・天・太陽・方角・月と星・虚空・暗黒・熱および人間の息・ことば・眼・耳・心・皮膚・認識・精液(Ⅳ・7・3—23)を内部にあって制御する存在である。アートマンはすべてのものに含まれ、すべてのものの核心である。しかし、それは全宇宙におけるただ一つの核心であり、それ以外には何一つ存在しない。それゆえ、次のように言われる——「それは見られずに見ているものであり、聞かれずに聞いているものであり、考えられずに考えているものであり、認識されずに認識しているものである。これよりほかに見ているものは存在しない。これよりほかに聞いているものは存在しない。これよりほかに考えているものは存在しない。これがお前のアートマンであり、内部の制御者であり、不死なるものである……」(Ⅲ・7・23)、と。

ヤージニャヴァルキヤは、大地などの存在を否定していない。彼はただ大地などの内部でそれらを制御するた、だ、一、つ、の、存、在、を、発、見、し、て、喜、ん、で、い、る、だ、け、で、あ、る。あるいは、彼は夫や妻などがいとしくないと**も**言**っ**ては**い**ない。世界は価値の点でアートマンに劣ると考えているだけである。ヤージニャヴァルキヤの眼から見れば、世界は確かにそこに**あ**るのである。彼は世界の**実**在を否定は**し**ない。しかし、彼の関心は低次の存在としての世界ではなく、世界の核心であり、価値の価値としてのアートマンへと向けられている。そして、アートマンが光り輝けば、それに比例して世界がますます暗黒に見えて来る所以である。すべてに内在するアートマンと異な**つ**たものは苦

である(Ⅲ・4・2およびⅢ・5・1)——これがヤージニャヴァルキヤの世界観である。

それでは、ヤージニャヴァルキヤの発見したアートマン(atman)とは、一体、何であろうか。彼はそれを「完全な英知の塊り」(Ⅳ・5・13)として把握した⁴⁾。彼は他の箇所ではそれを「認識の塊り」にほかならないと言っている(Ⅱ・4・12)。彼によれば、この英知ないし認識の塊りがアートマン、すなわち、われわれ自身の真の性質である。しかし、アートマンは時間と空間のなかには存在せず、個別的でユニークな存在ではない。それはむしろ理念的な存在である。それは個物としての性格をもたず、永遠の存在である。アートマンが「認識の塊り」であるというのは、それが塩の塊りのように終局的には無制約で無限の存在であるという意味である。

以下において、わたくしはヤージニャヴァルキヤのアートマン観についてささやかな考察をめぐらしてみたい。

I 靈魂の二つの状態

すでに見たように、アートマンは万物に内在し、万物を内部にあって制御している存在である。このアートマンの本質は英知ないし認識である。このアートマンはさまざまな形を取ってあらわれる。ところで、すべての存在の核心がアートマンであるとすれば、人間の核心もアートマンでなければならぬ。われわれは、普通、アートマンを真実の自己あるいは靈魂などと訳すことができるが、古代インドにおいては、プルシャ(purusa)ということばも人間の靈魂を意味する。プルシャは元来「人間」という意味であるが、ウパニシャッドにおいてはそれはアートマンと同じく人間の靈魂を意味することばであると考えてよいであろう。

さて、ヤージニャヴァルキヤはアートマンに三つの状態があると言う。靈魂の三つの状態は、覚醒、夢および

熟睡の三つを指す。覚醒というのは、目覚めている状態である。ヤージニャヴァルキヤの思想がわれわれにとつて示唆的なのは、彼が覚醒のほかに夢と熟睡を生活の重要な機能として考察したことである。われわれの生活は決して覚醒からだけ構成されているのではなく、夢と熟睡も人間生活の重要な生活の営みでなければならない——ヤージニャヴァルキヤはこのように考えたのである。しかもその上、彼は死の問題もあわせて観察することを忘れなかった。

ジャナカ王とヤージニャヴァルキヤはある時「プルシャは何を光としているか」、ということを話題にした。ヤージニャヴァルキヤは、人間が目覚めている時にはどのようにして活動するかということについて、王に次のように教えたのである——「ヤージニャヴァルキヤよ！この人間は何を光としているのか、と。おお、大王よ！彼は太陽を光としている、と彼は言った。彼は太陽の光によって坐り、歩き廻り、仕事をし、帰宅する、と。ヤージニャヴァルキヤよ！その通りである。」(IV・3・2)、と。ヤージニャヴァルキヤによれば、人間(プルシャの本質はアトマンである。ヤージニャヴァルキヤ自身はこの点について次のように述べている——「アトマンとは何か、と。それは認識から成り、もろもろの生氣(感覚器官)のなかにあり、心臓の内部で輝いているこの人間(プルシャ)である・・・」(IV・3・7)、と。

ヤージニャヴァルキヤの考えによれば、認識から成るところの内的な光としてのプルシャ(人間のなかの人間)は、覚醒・夢・熟睡の三状態を通じて存在している。日中には、このプルシャは諸生氣(感覚器官)の助けを借り、日の光などで活動する。しかるに、日の光などが消えてしまえば、彼はこれらのものによって活動することはできない。その場合には、人はアトマン自身の光によって活動する——このようにヤージニャヴァルキヤは言う。ヤージニャヴァルキヤは明言していないけれども、人間の感覚器官の活動が停止する時には、ア—

トマンはみずからの光によって輝くというのが、彼の真意であろう。つまり、アートマンがみずからの光によって輝く時、「夢」(svapna)が成立するわけである。人間の感覚器官が停止すれば、彼は感官の助けを借りて外界の事物を認識することはできない。すなわち、彼は眠りに就くのである。眠りの世界は、いわば、やみである。しかし、たとい感覚器官の働きが停止しても、アートマンは依然として作用し続け、内的な光としてやみの世界を照らすのである。アートマンの光によって照らし出される世界——それが夢である。アートマンの本質は英知ないし認識であるから、それがみずからの光によって輝くということは、結局、夢は認識にはかならないということである。それゆえ、アートマンないしプルシャが「夢になる」、というふうに表示することができるであろう(IV・3・7)。

ヤージニャヴァルキヤの夢の解釈は、かならずしも一様ではない。一方においては、彼はアートマンは人間が眠る時身体を離れないと考えている。そして、夢のなかでは現実の世界は存在しない。ヤージニャヴァルキヤ自身のことばを借りて言えば、「それが眠りに就く時それはすべてを含むこの世界の小部分を切り離し、みずからそれを破壊し、みずからそれを築いてから、みずからの輝きによって、みずからの光によって眠りに就く。ここにおいて、この人間はみずからの光である。」(IV・3・9)。アートマンは自覚めている世界の材料の一部分を取り出し、外界の印象(vasana)に基づいて、それからみずからの光によって自由に自己の世界を築くのである。この意味で、アートマンは夢の世界の創造者である(IV・3・10—14)。他方、ヤージニャヴァルキヤは、アートマンは人間が眠っている間に身体を離れて自由にさまよう(IV・3・14)という考えを述べている。これら二つの考えを折衷すれば、アートマンは身体の内部分にとどまっているけれども、自由に身体をさまよい歩くという解釈が成り立つ。

しかし、後世のヴェーダーンタ哲学や大乘仏教に影響を与えたのは、覚醒と夢の二つをヤージニャヴァルキヤが並置したことである。彼はこの世とあの世の中間に夢を位置づけ、夢を見る人はこの世とあの世の二つを見るのだと教えた（IV・3・9）。もちろん、ヤージニャヴァルキヤは夢の世界が覚醒の世界から區別されねばならぬと考えていたが、彼は夢の世界の材料が覚醒の世界の材料から構成されると説くことによって、二つの世界が同じ材料から築かれることを明らかにした。ヤージニャヴァルキヤは言う——「彼にとって、これ（睡眠）は覚醒の場所である、と。なぜなら、彼は目覚めている時に見るのと同じものを眠りながら見るのだから。」（IV・3・14）、と。夢の世界と覚醒の世界はこのように並列されることによって、やがてこの覚醒の世界も夢の世界のように幻であるという立場が用意されるようになる。

ヤージニャヴァルキヤの立場に立つて発言すれば、覚醒の世界も夢も人間の理想ではない。彼はこの二つの世界のかなたに、人間の理想を求めたのである。彼自身のことばによれば、もっとも望ましい状態は、この二つの世界を超えることである——「鷹あるいは鷲がこの空中を飛びまわったあとで疲れて双翼をたたんでうずくまり始めるように、この人間は熟睡している時には如何なる願望も望まず、如何なる夢も見ないこの状態へ疾走する。」（IV・3・19）。なぜ、熟睡（*susupti*）が望ましいかと言えば、この状態においては、人は如何なる願望も望まず、如何なる夢も見ないからである——「実に、これが欲求を超え、悪を滅し、恐怖を知らない彼の形態である。愛する女に抱擁された人が外も内も全然知らないように、この人間は英知としてのアートマンに抱擁された時には、外も内も全然知らない。実に、これが欲望の達成された、アートマンを欲する、欲望のない、悲しみを離れた彼の形態である。」（IV・3・21）。要するに、「……このアートマンは内もなく外もなく、完全な英知の塊りである……死後、意識は存在しない……」（IV・5・13）という、あのマイトレーイー

に対する教えは、夢一つ見ない熟睡状態によって説明されると、わたくしは解釈する。

II カルマ観と死後の運命

ブラーフマナの理想は、死後天界に到達することである。ブラーフマナ期の人々がもつとも恐れたのは、死後天界に達してもそこでふたたび死ぬことであつた。天界を確保し、来世での再死から人々を守るのは、言うまでもなく、祭祀（yajña）である。しかるに、ヤージニャヴァルキヤにとって、天界はもはや理想ではなかつた。また、未来の運命について決定的なのは祭祀という名の行為ではなく、人間が自由意思によって形成した倫理的な行為であつた。祭祀の行為ではなく倫理的な行為が人間の未来のあり方を決定するという思想——これはウパニシャッドにおいてヤージニャヴァルキヤによって初めて力強く説かれた思想である。しかし、彼のこの行為観はきわめて素朴なものであつたことは否定できない。インド思想史において決定的なカルマ観の萌芽が、アールタバーガとヤージニャヴァルキヤの討論のなかで初めて形成されたことは、よく知られている通りである。アールタバーガは、ヤージニャヴァルキヤに対して次のように言う——「ヤージニャヴァルキヤよ！と彼は言つた。この人間の死後、ことばが火に婦人し、息が風、眼が太陽、心が月、耳が方角、身体が大地、自我が虚空、頭髪が草、体毛が樹木、血と精液が水のなかに置かれる時、この人間はどうなるのであろうか。」（Ⅲ・2・13）、と。これに対して、ヤージニャヴァルキヤは次のように答えた。——「いとしいものよ！手を取れ！アールタバーガよ！このことについては、われわれ兩人だけが論じるであろう。これはわれわれ兩人の間の事柄であり、人々の間で論ずべきことではない。」（同上）、と。そこで、兩人は人のいないところに行つて二人だけで話し合い、合意に

達した——「兩人は立ち去って相談した。兩人が語ったのは、カルマ（Karma || 行為）であった。兩人がほめたえたのは、カルマであった。実に、人はよい行為によってよくなり、わるい行為によってわるくなる、と。そこで、ジャーラトカーヴァ・アールタバガは沈黙した。」（同上）、と。

ヤージニャヴァルキヤのカルマ（行為）観はきわめて素朴である。一言で言えば、「人はよい行為によってよくなり、わるい行為によってわるくなる」というのが、彼の行為観である。「よい行為」とは何か、あるいは「わるい行為」とは何か、ということについて、ヤージニャヴァルキヤは何一つ述べていない。ほかの古いウパニシャッドには善悪二つの行為の内容が述べられているが、彼自身はこの問題については触れていない。わたくしはこの点については深入りせず、カルマ（行為）が人間の未来の生の形成に対して決定的な要因であるということだけを指摘するにとどめよう。

ヤージニャヴァルキヤによれば、人間のアートマンは全体性原理であり、その限りではすべてのものからなっている。それは「認識から成り、心（マナス）から成り、息から成り、眼から成り、耳から成り、大地から成り、水から成り、風から成り、虚空から成り、熱から成り、熱でないものから成り、欲望から成り、欲望でないものから成り、怒りから成り、怒りでないものから成り、法から成り、法でないものから成り、すべてものから成っている。」（IV・4・5）。アートマンは全体性原理として善悪のすべてである。ヤージニャヴァルキヤはこのように述べた直後に、各人の死後の運命が各人の行為によって決定されることを強調する。すなわち、彼の考えによれば、人間のあり方を最終的に決定するのは、彼自身の行為である。ヤージニャヴァルキヤは、この点について次のように説いている——「彼がこれから成り、あれから成ると言われる時には、人は行動し、ふるまうようになる、ということの意味する。よい行為をするものはよくなり、わるい行為をするものはわるくなる。人は善行

によってよくなり、悪行によってわるくなる。さて、確かに人々は言う——この人間は欲望から成っている、と。人は欲する通りに意図し、どんなことを意図しよう、彼は意図した通りに行為を行ない、どんな行為をしよう、と、彼はそれに（ふさわしいものに）なる。」（同上）、と。

一方において、ヤージニャヴァルキヤは人間がアートマンであることを強調する。けだし、人間の核心はアートマンだからである。すなわち、それはすべてのものから成っている。この意味で、それは善悪のすべてを自己のうちに含んでいる。しかし、他方、アートマンの存在と並んで、ヤージニャヴァルキヤは経験的な立場からも人間を観察する。彼は人間を二つの類型に分類して論じることを試みる。すなわち、彼は人間を「欲しているもの」と「欲していないもの」の二つに分け、欲望（kama）が人間性の根本特徴であることを指摘する。彼は「人はよい行為によってよくなり、わるい行為によってわるくなる」と言いながら、同時にまた人間の行為を成立させる動機が欲望であることを洞察した。人が行為を行なうのは、彼が欲するからである。従って、よい行為を行なおうとする人はよい意図をもたなければならず、よい意図をもつためにはよい欲望をもたなければならぬ。

しかし、ヤージニャヴァルキヤは終局的には欲望そのものの廃棄をめざしている。欲望の解消——これがヤージニャヴァルキヤの理想であった。ヤージニャヴァルキヤは愛妻マイトレーイーに不死を説くが、不死とは、要するに、人間の心臓のなかに宿るすべての欲望の解消にほかならない（IV・4・7）。

このように、欲望を廃棄すれば人間のカルマ（行為）も廃棄され、その結果、人間は善悪の二つを超越し、カルマによって束縛されないはずである。しかし、人間が欲望をもっている限り、カルマの作用はこの世で尽きることはない。それは人間の死を超え、彼の来世の運命を形成せずにはおかない。それゆえ、ヤージニャヴ

アルキヤは次のような詩を引用して、死後人間がふたたびこの世に生まれ変わることを説いた——「彼の心が付着しているところへ微細身はもろもろの行為とともに行く、それだけに執着しているのだから。彼がここで行なう行為が何であれ、その行為に対する報酬を得て、彼はあの世からふたたび（新しい行為のため）、この世へ帰って来る。」（IV・4・6）、と。われわれはここに輪廻思想の萌芽を見てとることができるであろう。生前の行為の作用は現世で尽きず来世まで及ぶという考え方が、すなわち、それである。人間の生前の行為の作用が死後のアトマンの運命を決定する——これが輪廻である。ヤージニャヴァルキヤは、この点について次のように述べている——「いもむしが草の端に達し、他の登り道に近づいたあとで自己自身を縮めるように、このアトマンはこの身体を破壊し、無知を追いついてから他の登り道に近づき、自己自身を縮める。織姫が織りものの小部分を取り去って、他の、より新しい、より美しい形、すなわち、祖霊の、あるいはガンダルヴァ（天界のある妖精の名）の、神々の、あるいはプラジャールパティ（生類の支配者の名）の、あるいはブラフマン（梵天）の、あるいは他の存在の形を作る。」（IV・4・4）、と。

ヤージニャヴァルキヤは、一方においてはカルマが人間の未来の運命を形成することを認めている。それは倫理的、応報の立場である。カルマ観においては応報が要求される。人間は生前の所業に応じて善悪いずれかの存在として再生するからである。その際、決定的なのは欲望である。

他方、彼は応報を廃棄する立場を肯定する。欲望が解消した時初めてカルマは廃棄されるのであり、欲望をもたない人だけが解脱すると言われる。ここではまだ、解脱の原因としての知識は強調されていない。いずれにせよ、ヤージニャヴァルキヤのカルマ観は、後世のインド思想に測り知れない影響を与えたのである。

Ⅲ 行為と知識

ブラーフマナの思惟方法によれば、人生の理想は天界の獲得である。しかし、ブラーフマナにおいては、祭祀の行為および知識に最高の価値が与えられている。祭祀の秘密の意義を知らない人は、祭祀において何の成果を収めることもできないからである。知識を伴わない行為は無力である——これがブラーフマナの立場である。ウパニシャッドは、シュトラウスの言うように、「自己の目的のために、知識の呪術的な力を解釈し直した」のである。シャタパタ・ブラーフマナ（XI・4・3・20）のなかで、ヤージニャヴァルキヤは祭祀の行為、および知識の二つが願望成就の手段として重要であることを指摘する。シャタパタ・ブラーフマナのなかで発言の機会を得ているヤージニャヴァルキヤは、「このように知ってこの祭祀を行なう人、あるいはこのようにこれを知る人は誰であろうと、彼はミトラを見出す、王国は彼のものである、彼は再死を避けて寿命を全うする。」と述べている。この文章によれば、ヤージニャヴァルキヤは知識を伴って祭祀を行なうことが願望成就にとって不可欠であると考えているが、同時に祭祀の知識だけでも十分だとも言っている。いずれにせよ、ヤージニャヴァルキヤは祭祀の知識が欠けていれば祭祀の行為そのものは無効であると断言してはばからない。ヤージニャヴァルキヤは、なぜ、人は祭祀の行為を行なわなければならないのかと問い、次のように答えている——「・・・実に、もしもお前がこれ（祭祀の行為）を知ってアグニホートラを捧げた時には、それはお前によって捧げられたものである。しかし、もしも実に（知らずにそれが捧げられた時には）、それはお前によって捧げられたものではない。」（シャタパタ・ブラーフマナ、XI・5・3・4）、と。彼にとつて、問題は祭祀の行為ではなく、祭祀の知識そ

のものであった。ジャナカ王がヤージニャヴァルキヤに対し、アグニホートラとは何かと尋ねた時に、彼はそれは乳であると言った。しかし、もしも乳が存在しない時には、何によって祭るのかと言われ、ヤージニャヴァルキヤは米と大麦の二つを挙げた。もしこれらがなければ何をもって祭るのかと問われ、彼は他の菓草、森の菓草、樹木を挙げた。もしも樹木がなければ何によって祭るのかと言われて、彼は考える——水によって、と。もしも水がなければ何によってお前は祭るのか、と。最後に、彼は眞実は信仰のなかに供物として捧げられたと答えた(シャタパタ・ブラーフmana、XI・3・1・2——4)。

ブラーフmanaの知識が祭祀に向けられているとすれば、ウパニシャッドの知識は祭祀ではなく解脱をめざしている。ウパニシャッドにおいては、祭祀の行為は排斥され、知識だけが残る。ここでは、天界はもはや求められない。ウパニシャッドにおいては、飢えと渇き、悲しみと妄想、老と死を超えたあのアートマンが知識の対象であるからである。アートマンの知識がウパニシャッドの根本的な特徴である。しかし、シャタパタ・ブラーフmana (X・5・4・16) のなかには、天界の願望はもはや望まれないという思想も見出される——

「……知識によって彼らは欲望が消滅しているところに登る。そこへは祭宮に対する報酬も、苦行者たちも行かない。彼らには知識が欠けているから……」(シャタパタ・ブラーフmana、X・5・4・16)、と。

さて、ヤージニャヴァルキヤがブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドのなかで求めた知識とは、一体、何であったのであろうか。この問題を考察するために、われわれは次の文章をここに引用したい——

なぜなら、いわば三元性が存在する時には、あるものは他のものを嗅ぎ、あるものは他のものを見、あるものは他のものを聞き、あるものは他のものに話しかけ、あるものは他のものを考え、あるものは他のものを認識するからである。しかし、実に、すべてが彼のアートマンになった時には、人は何によって誰を嗅ぐべきであらうか。人は何によって誰を見るべきで

あろうか。人は何によって誰を嗅ぐべきであろうか。人は何によって誰に話しかけるべきであろうか。人は何によって誰を考へるべきであろうか。人は何によって誰を認識すべきであろうか。ああ、人は認識の主体を何によって認識すべきであろうか。」と (IV・5・15)

わたくしがこの文章を引用したのは、それがヤージニャヴァルキヤの思想を理解する上で決定的に重要な箇所と思われるからである。わたくしが特に注目したいのは、「すべてが彼のアートマンになった時には」(yatratv asya sarvam aimavahit) という文句である。ヤージニャヴァルキヤにとって、アートマンはすべてであるもの (sarvam) である。それは、わたくしのことばで言えば、全体性原理^カである。それはまさに一切であるから、主観でもなければ客観でもない。それは主客の二つを含むところの全体である。見るものと見られるもの、聞くものと聞かれるもの、認識するものと認識されるものの二つは主観および客観として鋭く対立する。そこには、いわば、二元性が存在する。しかるに、ヤージニャヴァルキヤによれば、一切のものはアートマンであるから、このアートマンはすべての対立を超えた全体的なものにほかならない。そして、当然のことながら、あるものを見るためには、見るものに対立する第二者・他者が存在しなければならぬ。ところが、主観でもなければ客観でもない、その両者を両極とするところのアートマンは、対象として概念把握することのできない性質のものである。それゆえ、ヤージニャヴァルキヤは、アートマンを概念把握することを断定して、ネーティ・ネーティ(そうではない、そうではない)と否定的にしか発言できなかった (IV・4・22参照)。このアートマンは、塩の塊りのように無制約・無限定な「認識の魂り」にほかならない。

ヤージニャヴァルキヤは、このような全体性原理としてのアートマンが「把握できな」(agrhya, IV・5・15) ことを強調し、さらにガールギー女史に対しそれが不滅なもの (aksara) であることを教えて次のよう

に言った——「……それは粗大でもなければ微細でもない。短くもなければ長くもない、血もなければ脂肪もない。影もなければ暗黒もない。風もなければ虚空もない。執着もない。味もなければ香りもない。眼もなければ耳もなく、ことばもなければ心もない。熱もなければ息もなく、口もない。尺度もなければ、内もなく、外もない。それは何も食べない。誰もそれを食べない。」(Ⅲ・8・8)、と。

ヤー ジ ニ ヲ ヴ ァ ル キ ヤ が 人間を「欲するもの」と「欲しないもの」の二つのタイプに分けたことは、すでに述べた通りである。しかし、ここで注意しなければならないことは、欲望を否定する人でさえ、自己のアートマンは欲しているという事実である。われわれは「アートマンを欲する」(ātma-kāma, IV・3・21)という表現を知っている。一切のものが自己自身のアートマンであると知る人は、その上何を欲するのであるうか。すべてをすでに獲得した人間はすべてを獲得しているのだから、もはやそれ以上望むことはできないはずだ——これが、ヤー ジ ニ ヲ ヴ ァ ル キ ヤ の 立場である。このように、欲望をもたないということは、一切を獲得していることから、それ以上は欲することができない、あるいは欲する必要があるということと同じである。そして、この一切であるもの・全体的なもの、自己自身のアートマンであることが同時に認められなければならない。「すべてが彼のアートマンになった時には」、彼はアートマンを知っているのであり、同時にまたこのアートマンの体験は彼がすでにすべての欲望を達成し、それ以外のものは無用であることを示唆する。そして、このアートマンは万物に内在する。このアートマンは「飢えと渇き、悲しみ、妄想、老いと死」を超えた存在であり、バラモンがこのアートマンを知った時には、彼らは息子に対する欲求、財産に対する欲求および世間に対する欲求を放棄して、乞食の生活を送りながら放浪する(Ⅲ・5・1)。

ブラーフマナの理想が天界という名の願望達成であるとすれば、ウパニシャッドのそれは「認識の塊り」が真

の自己自身であることを知ることのなかに求められよう。ヤージニャヴァルキヤもまた、祭祀の道を拒否して知識の細道を選んだ。彼によれば、アートマンを知った人の身体は、脱ぎ捨てられた蛇の皮が蟻塚に死んだまま横たわっているように(Ⅳ・4・7)、彼にとつて無用の長物である。ウパニシャッド時代の賢者の理想は、全体性原理としてのアートマンを知ることによって、恐怖の感情を除去することである。ヤージニャヴァルキヤが選んだのは、実に知識であった。彼はこのような知識をジャナカ王に対して教えたのであった——「これが大いなる、まだ生まれないアートマンである。それは老いることなく、死ぬことなく、不死であり、恐怖を知らない。それはブラフマンである。実に、ブラフマンは恐怖を知らない。なぜなら、このように知る人は、実に、恐怖を知らないブラフマンになるから。」(Ⅳ・4・25)、と。

Ⅳ 存在の問題

ヤージニャヴァルキヤは、バラモンとの論争においても、またジャナカ王との対話においても、存在の問題について立ち入った議論はしていない。彼はジャナカ王の宮殿で多くのバラモン衆とアートマンをめぐって討論したけれども、存在とは何か、という問いには本格的に答えていない。彼はアートマンは「大いなる存在の吐息である」(Ⅱ・4・10)と、比喩的に言っているだけである。ウシヤスタを始めとするバラモンとの討論において、「眼の前にある、明白な、すべてに内在するアートマンであるブラフマンをわたしに説明せよ。」と言われ、ヤージニャヴァルキヤはただ「それがすべてに内在するお前のアートマンである。」としか答えていない。彼はすべてに内在し、すべてを内部から制御するものを「かのもの」(Iyat)と呼ぶこともある(Ⅲ・9・9⁸⁾。

しかし、存在に関してヤージニャヴァルキヤがウパニシャッドのなかで言っていることは、精々、アートマンは測り知れず、しかも単一なものであるということくらいであろう(IV・4・20)。結局、ヤージニャヴァルキヤにとつて、アートマンは「大いなる存在」であり、「認識の塊り」にはかならない(II・4・12)。

ヤージニャヴァルキヤは、なぜ、存在の問題について雄弁ではないのであろうか。彼はアートマンの存在について関心を抱いていないのであろうか。答えは「ノー」である。それでは、どうしてブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドにはアートマンの性質に関する論理的な探究が見出されないのであろうか。答えは簡単である。ヤージニャヴァルキヤはアートマンの概念、把握を断念したからである。彼はアートマンを知的に、あるいは同じことだが、人間の理性を通じて対象として把握することは不可能だと考えた。彼によれば、アートマンは概念によって把握することはできず、それはむしろ内面的な体験あるいは内観によって確認され得る性質のものであった。それゆえ、彼は次のように言う——「……彼は多くのことばについて考えるべきではない。なぜなら、それはことばを疲れさせるだけだから。」(IV・4・21)、と。

西洋哲学史においても、ウパニシャッドとエレア学派の類似性は熟知されている。この箇所でも、両者についてきわめてささやかな考察を試みよう。ヤージニャヴァルキヤはアートマンを不生の存在として捉え、次のように述べている——「これが大いなる、まだ生まれぬアートマンである。それは老いることなく、死ぬことなく、不死であり、恐怖を知らない。それはブラフマンである。実に、ブラフマンは恐怖を知らない。なぜなら、このように知る人は、実に、恐怖を知らないブラフマンになるから。」(sa va'ēsa mahān aja'ātma'jaro'maro'mrito'bhayo brahma — abhayam vai brahma — abhayam hi vai brahma bhavati ya evam veda Ⅱ IV・4・25)、と。これに対してエレア学派のパルメニデスは、存在があることについて次のようなしるしを示

すのである——

..... ὡς ἀρέωντων ἐόν καὶ ἀνώλεθρον ἔστω, ἔστω γὰρ οὐλομένης τε καὶ ἀρπηνῆς ἡ δ' ἀτέλεστων· οὐδέ ποτ' ἦν οὐδ' ἔσται, ἐπεὶ νῦν ἔστω ὁ μὲν πᾶν,

(Diels, Fr, 8)

・・・存在は不生・不滅である。なぜなら、それは完全であり、不動にして終わりががないからである。それは過ぎ去ったものでもなく、未来のものでもない。それは今であり、すべて一緒であり、連続しているから。

ヤージニャヴァルキヤのオートマンもパルメニデスの存在 (εἶναι) も、ともに不生不滅であるが、両者はある点で決定的に異なっている。すなわち、ヤージニャヴァルキヤのオートマンは概念把握されない存在、対象になることのできない存在である。それは人間の感覚器官は無論のこと、認識によってさえ把握されない (IV・4・22)。しかるに、パルメニデスの場合には、ヤージニャヴァルキヤとは反対に、存在とは概念把握される存在にはかならない。それゆえ、パルメニデスと言う——・・・ τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἔστω τε

καὶ εἶναι (Diels, Fr. 5) と。彼によれば「思索すること」と「存在」とは同一である。パルメニデスにとっては、存在は存在しなければならぬ。なぜなら、無は認識もされなければ把握することもできないから、それが存在することは不可能だからである。パルメニデス自身は、この点に関して次のように言っている——

— κοῆ τὸ λέγειν τε νοεῖν τ' ἐόν εἰμὲναι· ἔστω γὰρ εἶναι, μηδὲν δ' οὐκ ἔστω· (Diels, Fr. 6 , 存在はあると君は言いかつ認めなければならぬ。それは存在しなければ

ならない。なぜなら、無はないからである。と。彼が無の存在を否定した理由は、無が存在するものと考えられないからである。無は存在しない、なぜならそれは思索の対象ではないからだ。あるものが存在するためには、それは存在することが可能だと思索されなければならない。思索の対象であると考えられることと存在とは同一である——なぜなら、思索することと存在とは同一だから、(*‘to rāḍa aḍoḍa voḍṭu iḍṭiṭu te kaḍi eḍṭuḍi*) である。ここでは、存在は人間の思考によって構築された何ものかである。それは、人間の思考の投影である。

ヤージニャヴァルキヤによれば、アートマンを把握することは不可能である。人はそれを把握することはできない。アートマンは認識の主体ではあるが、それは決して認識されない存在である。にもかかわらず、その実在は確実である。なぜなら、賢者はそれを真の自己自身として体験するからである。賢者は「アートマンのなかにアートマンを見る」のであり、また、「すべてのものをアートマンとして見る」のである(IV・4・23)。パルメニデスの場合には、存在が肯定されるのは、あくまで存在以外には存在するものがあるとは考えられないからである。パルメニデスが存在は生じもしなければ滅しもしないと考えたのは、出生と死の二つを前提として認めなかったからである。パルメニデスの「存在」は論理によって構築された概念の世界に属し、それ以外の何ものでもない。彼が存在を認めるのは、*‘ou rāḍa paḍṭu oḍḍe voḍṭu iḍṭiṭu ḍṭiḍṭu ouḍe* (*Diels, Fr. 8*)。それは存在しないとは言えないし、また、考えられない) からである。しかし、ヤージニャヴァルキヤのアートマンは、すべてに内在する内部の制御者である。それは「飢えと渇き、悲しみ、妄想、老いと死を超えたもの」(III・5・1)であり、「見られずに見ているものであり、聞かれずに聞いているものであり、考えられずに考えられているものであり、認識されずに認識しているもの」(III・7・23)にはかならない。

もしもパルメニデスが概念把握を重視したとすれば、ヤージニャヴァルキヤは内面的な体験および直観的な確証を好んだと言えるであろう。論理を行使して「存在」を証明することは、ヤージニャヴァルキヤの課題ではなかった。なぜなら、彼の課題は「大いなる存在」(Eṣahad-ḥūtiā)を自己のアートマンであると知って、人間存在につきまとう恐怖の感情を除去することであつたからである。ヤージニャヴァルキヤの「存在」は、人間の思索の対象ではなく、それ自体としては認識不可能な自己自身アトマン・認識の主体であつた。

結 論

ヤージニャヴァルキヤの求めたものは「不死の希望」であつた。愛妻マイトレーイーが夫のヤージニャヴァルキヤから教わろうとしたのは、実に不死そのものであつた。しかし、ヤージニャヴァルキヤは、財産によつては不死の希望は存在しないと考へていた。それでは、不死はどのようにして獲得されるのであろうか。ジャナカ王との對話のなかに見出されるある詩句は、ヤージニャヴァルキヤの不死観を生き生きとわれわれに伝えるのである――

彼の心臓のなかに宿るすべての欲望が解消する時、

死すべきものは不死になり、彼はここでブラフマンに達する。(IV・4・7)

ヤージニャヴァルキヤによれば、欲望を解消しない限り、人間には不死の希望はない。しかし、欲望が解消すれば、人間は悪から解放されて恐怖を知らない状態に到達する。もしも人間が欲望をもたなければ、「彼は善に

よって触れられず、悪によって触れられない。なぜなら、彼はその時、心のすべての悲しみを超えているから。」
 (IV・3・22)である。

ヤージニャヴァルキヤは、欲望を捨て去ることが不死への道であると説いた。彼は「息子に対する欲求・財産に対する欲求・世間に対する欲求を放棄して、乞食の生活を送りながら放浪する」(III・5・1)ことを、われわれに教える。彼はさらに続けて次のように言う——「……学者は学識に飽いた時には子供のような単純さにとどまっていたるべきである。子供のような単純さと学識に飽きた時には、彼は沈黙の隠者となる。沈黙の隠者でない状態および沈黙の隠者の状態に飽きた時には、彼はバラモン (brahmana) である……」(同上)、と。

しかし、欲望の否定によって心の悲しみは解消するが、歓喜は得られない。真のバラモンはすべての心の悲しみを超えると同時に、アートマンの、歓喜を体験しなければならぬ。悲しみを超え、歓喜を得て初めて人は不死の状態に達することができる——これがヤージニャヴァルキヤの不死観である。アートマンだけが真に存在し、それは人間が目覚めている時だけでなく、夢を見ている時にも、あるいは熟睡している時にも、それ自身は見られることも聞かれることも、あるいは認識されることもなく、不断に活動している——このようにヤージニャヴァルキヤは考えた。彼によれば、たとい対象(アートマンと別の二者・他者)が存在しなくても、アートマン(認識の塊り)が見たり、嗅いだり、味わったり、語ったり、聞いたり、考えたり、触れたり、認識したりしているのであって、それらの作用は永遠に消滅しない。アートマンの活動、認識作用が連続して尽きることがないことを、ヤージニャヴァルキヤは次のようなことばで表現している——「実に、(熟睡時に)彼が見ない時には、彼は見ないけれども、確かに見ている。なぜなら、見ているものにとって見ることの喪失は存在しないから。それは不滅であるから。しかし、彼が見ることのできる第二のもの、それ(アートマン)と異

なり、それと分離しているものは存在しない。」(IV・3・23)、と。実に、アートマンが不滅であることを知ることは、最高の歓喜である。(IV・3・32—33)。

しかし、不死とはこの人格が来世に生き残って存続することではない。「死後には意識がない」のであり、賢者は死ぬ時ただ「認識の塊り」ないし「英知の塊り」としてのアートマンと一つになるにすぎない。ヤージニャヴァルキヤは愛妻に別れを告げて死への旅立ちをし、善悪の世界、二元を超え、放浪者としてその生涯を終えたものと思われる。彼は欲望を断つことによって心の悲しみを超えようとする。しかも、彼にとっては天界はもはや何の魅力もない。彼は、「ここから解放された(死ぬ)時、ブラフマンを知っている賢者たちはその道によって天界に入る。」(IV・4・8)という語句を引用しているけれども、この箇所はそれほど重要ではなく、ヤージニャヴァルキヤの精神からは遠いものである。

ヤージニャヴァルキヤは祭祀の専門家として出発しながら、祭祀の末梢的な知識および技術に対して批判的・嘲笑的であった。彼は特殊的・専門的な祭祀の分野を超え、人間性の広々とした領域のなかで自由に考え、独立の精神を保持することができた。一般に、初期ウパニシャッドにはブラーフマナの影響が濃厚に残り、神話的な発想はウパニシャッドの思想家の考え方を重苦しく束縛している。それに反して、ヤージニャヴァルキヤは独立の精神をもって自由に思索し、自由に発言している。この点に関して、オットー・シュトラウスは次のように述べている——「至るところに神話的なものが押し入り、古い比喻に束縛され、人はそれらからまぬがれることができない。それに反し、ヤージニャヴァルキヤ説は何と自由で威厳のあることか！」¹²⁾と。わたくし自身も、シュトラウスとまったく同じ感慨を抱いていることを、ここに告白しなければならない。

- (1) シャタパタ・ブラーフマナにおいてヤージニャヴァルキヤが発言の機会を得ている箇所は次の通りである——I・1・9、I・3・1・21および26、I・9・2・12、I・9・3・16、II・3・1・21、II・4・3・2、II・5・1・2、III・1・1・4、III・1・3・10、III・8・2・24、IV・2・1・7、IV・6・1・10、XI・3・1・2——4、XI・4・2・17、XI・4・3・20、XI・6・2・1および4、XI・6・2・10、XI・4・1・10、XIII・5・3・6。シャタパタ・ブラーフマナにおけるヤージニャヴァルキヤとブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドにおけるヤージニャヴァルキヤの関係を論じたものとして、辻直四郎博士の「ヤージュニャヴァルキヤをめぐる」(『季刊宗教研究』第5巻第三号一九四三年「一二〇ページ」)およびLouis Renouの『Les Relations du Satapathabrahmana avec la *Bṛhadaranyakopanisad et la personnalité de Yājñavalkya* (Indian Culture 14, 1947, pp. 75—89)がある。
- (2) ルヌーによれば、ウパニシャッドを産み出したものは *brahmodya* (宗教上の聖なる主題・バラモン神学に関する論争) である。確かに *brahmodya* なしにはウパニシャッドの思想の形成は考えられない。ルヌーの前掲論文、八八ページおよび彼の *La passage des Brahmana aux Upanisad* (Journal of American Oriental Society 73, 1953, p. 141) 参照。
- (3) Indem man den Atman als den wahren Kern der Welt erkennt, empfindet man alles Empirische nur als den Ausdruck jener metaphysischen Größe——Otto Strauss, *Indische Philosophie*, München, 1925, p. 49. 湯田豊訳『インド哲学』東京 大東出版社、一九七九年、六〇ページ。
- (4) ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド(III・9・28)では「ブラフマンは認識(vijñāna)であり歓喜(ānanda)であるが、シャタパタ・ブラーフマナ、X・3・5・13では「歓喜およびそれ(精髓)ウパニシャッド」の認識は「アトマンである」(ānanda evāsya vijñānam ātma)と語られている。いずれにせよ「アトマンの本質は認識として捉えられてゐる」。
- (5) チャーンドーギヤ・ウパニシャッド、III・17、タイトイリヤー・ウパニシャッド、I・9参照。
- (6) 前掲書、五八ページ。
- (7) 全体性原理については、詳しくは拙著『インド哲学の諸問題』(大東出版社、一九七八年)、III ウパニシャッドの自我思想 3 ヤージニャヴァルキヤ、一九〇ページ以下参照。

(8) 「かのもの」はブラフマンであり、また、息(Prāṇa)でもある。

(9) 『インド哲学の諸問題』 IV ヴェーダーンタ哲学におけるインド的思索の特徴 3 ヘーゲルとの比較におけるシヤンカラ哲学の特質、二九二ページ以下参照。

(10) ヤージニャヴァルキヤは、ブッダの出家思想および欲望の否定を先取していると言えよう。ルヌーは、両者の関係について次のように述べている——*Les traces de bouddhisme qu'on relève ici sont des germes plutôt que des reminiscences, et a bien des égards, même quand il prend l'antithèse, Yaṅavalkya est le maître à penser (et à dire) du Buddha (Les relations du Śatapathabrāhmaṇa avec la Bhādarānyakopaniṣad et la personnalité de Yaṅavalkya, P. 89, n. 1.)*

(11) ヤージニャヴァルキヤの理想はブラーフマナ、すなわち「ブラモンである」。しかるに「ダンマ・パダ(Dhamma-pada)」においても、ブラモン(Brahmana)は理想像である。例えば、ダンマ・パダの三八三から四二三までの詩は、全部真のバラモンをほめたたえている。

(12) 前掲書、五六―五七ページ。

〔付記〕ウパニシャッドの根本特徴については、「ウパニシャッド——古代インドの呪術の世界——」(神奈川大学人文学会『人文研究』No. 74、一九七九年、掲載予定)という論文において詳しく論じた。なお、全体性の原理については、わたくしの著書、『比較宗教学』(東京 八千代出版、一九七九年)の第五章 ヒンドゥー教徒 を参照されたい。